

ペラギウスについて

長澤, 信壽

<https://doi.org/10.15017/2543259>

出版情報 : 哲學年報. 16, pp.1-22, 1954-11-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ペラギウスについて

長澤 信壽

聖アウグスティヌスの人間論は、人間をパウロに倣つて内的人間及び外的人間として把へ、同一の人間におけるこの二重の存在が、互に相反し相抗争しながら、しかも恰もケンタウロスのやうに、一體として統一性を維持してゐると考へるものである。外的人間は常に内的人間に反き、離れ、ただひたすら下に向つて落ちて行かうとする。しかも内的人間は、そのやうに己に離反しようとする外的人間を振り捨てて、ただ己のみとなることができなければかりか、内的人間が内的人間として存在するためにさへ、外的人間の存在を必要とする。内的人間と外的人間とはそのやうにして結合するのであるが、この結合の仕方は、聖アウグスティヌスによれば、人間の側から理解せられることのできない不思議な統一である。人間は、彼が繰り返して述べてゐるやうに、神によつて創造せられた存在であるが、同時にまた神なくしては——すなはち神から離れては、一日も存在することのできないものである。それは何故であらうか。人間は單に内的人間として存在するのではなく、外的人間としても存在し、假りに神が存在しないか、或は人間が神から離れるかするならば、人間は外的人間の重みに曳きつられて、滅びの道に限りなく轉落するところの存

在だからである。人間の在り方は謂はば深淵の縁を傳つてゐるやうなものである。しかも他方人間は、外的人間としての面をもつことなく、ただ内的人間のみとして生存することは不可能である。ここに人間が罪を犯すことなくして存在することのできない所以がある。蓋し人間は外的人間として人間の罪惡に連るからである。聖アウグステイヌスの聖籠論は、このやうな人間存在の在り方に對する自覺である。彼の聖籠論は、かくして、人間存在における罪惡の必然性の自覺、彼が常に用ひた言葉を借りて言ふならば、*peccatum originale*（原罪）の自覺に基くものである。或はもつと端的に言つて、われわれは自覺せられた原罪論が彼の聖籠論となつたと言つてもよいであらう。

- (一) 拙稿「内的人間と外的人間。——聖アウグステイヌスの人間論——」。哲學年報、第十四輯、昭和二十八年。一〇五頁以下。
(二) *De civitate Dei*, I, XXI, c. x: *quia et iste alius modus, quo corporibus adhaerent spiritus et animalia funt, omnino mirus est nec comprehendendi ab homine potest, et hoc ipse homo est.*

おそらく罪惡といふことについて彼ほど深刻に體驗し、深刻に思索したものは稀であらう。人間は罪惡を犯すことなくして生きることができない、無をふくむところの存在、それが人間の實存の形態である。無は人間の實存の免れようとして免れ得ないものである。彼が *peccatum originale* といふ言葉によつて言ひ表したものはこれであつて、その思想の起源はパウロに連ると言はれてゐるが、テルツルリアヌス、キュプリアヌス、アムブロシウスなどを經て聖アウグステイヌスに至つたものである。しかし原罪の思想が理論的に形成せられたのは、聖アウグステイヌスにおいてそれが彼自身の宗教的體驗と結合してからである。彼は自己の宗教的體驗によつてこの思想を深化し、精密にし、發展せしめた。われわれは専ら「ロマ書」の解釋に獻げられた彼の「様々の質疑について、シムプリキアヌスに寄す」の第一卷の巻頭に、いまだ「原罪」といふ言葉は用ひられてゐないけれども、その深い理解を見るが、こ

の言葉がはつきりと使はれたのは、ペラギウス派との十年近い論争の後、四二〇年に書かれた「ペラギウス派の人々の二書簡を駁す」が、おそらく最初であらう。彼はその第四卷第一章で *Quoniam ergo Pelagiani dicunt non esse originale peccatum, cum quo nascantur infantes...* (幼児が生れながらもつてゐる原罪は存在しないと、ペラギウス派の人々は言つてゐる……)と言つてゐる。⁽¹¹⁾ 原罪についての自覺が聖寵となる。だから聖アウグスティヌスに就つては、原罪論と聖寵論とは密接不可分に謂はば表裏相即して發展するが、その際、その發展の契機となり、それを促したものがペラギウス並びにペラギアニスムの主張者との論争である。彼がペラギウスやカエレスティウス (Caelastius) と論争するやうになつた時には、勿論、彼の聖寵論は既に一應形成せられてゐたし、またその形成には聖書、就中パウロの諸書簡に對する理解の深まつて行つたことが、基調となつたことはたしかに諸家の言ふ通りであるが、⁽¹²⁾ しかし聖寵のはたらきを否定する彼等との論争がその形成において勤めた役割は、積極的、構成的ではなかつたにせよ、極めて重要であつた。われわれはペラギウスやカエレスティウスとの論争を無視して、聖アウグスティヌスの聖寵論を理解することはできないであらう。

(一) *Diversis quaestionibus ad Simplicianum*, l. I, quaestio i, n. 1. これは三九六(七)年に書かれたものである。

(二) *Contra duas epistulas Pelagianorum ad Bonifacium*, l. IV, c. xi, n. 29. 聖アウグスティヌスの著作が、殆んど全部、完全に近い形を残してゐるの對して、ペラギウスの著作が大牛失はれてしまつてゐるので、斷定的に言ふことはできない。このせよ、*Peccatum originale* (原罪) といふ言葉は、たしかにペラギウスが用ひたのではなく、聖アウグスティヌスが用ひたもののやうである。おそらく彼は聖アムブロシウスの *originis injuriam* に暗示せられたのであらう。Cf. *Contra duas epist.*, l. IV, c. xi, n. 29. 本文で述べたやうに、本來、彼はこの語を「人間が生れながらもつてゐる罪惡」といふ意味に用ひてゐるが、*peccatum* といふ語のほかに、*tabes, vitium, aegritudo* といふ語も、ほぼ同じ意味に用ひてゐる。O. ペラギウスといふ

Bright は彼が刊行した *De spiritu et littera* (1914). の序論 (p. 8, n. 2) に *peccatum originale* とする語の初めを表している聖アウグスティヌスの著作として *De diversis questionibus ad Simplicianum*, I, l. n. 1 をあげているが、ここでは *originale* という形容詞は用ひられてゐない。

- (三) 例へば Reuter, *Augustinische Studien*, S. 10 f.; A. Harnack, *Dogmengeschichte*, Bd. III, S. 151; J. Mausbach, *Die Ethik des Heiligen Augustinus*, Bd. II, SS. 1-6.

他方、ペラギウスがわれわれの注意を喚起するのは、彼が聖アウグスティヌスと論争したためである。彼の出現は、キリスト教の歴史や教會史の上に、彼相應の意義をもつたかも知れないが、彼が聖アウグスティヌスと出會はなかつたならば、おそらく彼は異端として拒けられはしなかつたであらう。聖アウグスティヌスとの論争を離れて、彼が歴史的に如何なる意義をもつてゐるかは、差當りわれわれの間ふところではない。彼がわれわれの關心を呼ぶのは、聖アウグスティヌスの聖寵論の形成において、彼が一つの否定契機として勤めたところの役割のためである。以下わたくしは聖アウグスティヌスの聖寵論を學ぶ準備として、論争の外部的経過を辿つてみよう。

二

ペラギウスが歴史の上に浮び出て來るのは紀元四一一年、彼が永久にローマに別れを告げてから後であつて、四一八年以後、再び彼の姿は歴史の表面から消える。われわれは彼の生れた年代についても、彼の青年時代についても、何事をも知ることができない。四一八年に書かれた「キリストの聖寵と原罪とについて」で、聖アウグスティヌスがペラギウスは随分長い間ローマで生活し、種々の問題について論じたり論争したことを傳へてゐるから、われわれは

彼が四一一年以前、既に相當長い期間に亘つてローマで生活してゐたことを知る。しかしローマへ来る前はどこにゐたかもわからないし、また彼の生れた國についてもいまだ紛々とした諸説があつて、正確なことは知ることができない。彼は Brito 又は Britannicus といふ家名 (cognomen) をもつてゐた。そのために聖アウグスティヌスを始め、彼と同じく直接間接ペラギウス事件に参加し、ペラギウスに近い時代の、最も信頼に値するやうな人々、例へばパウルス・オローシウス (Paulus Orosius) (四一八年頃死) を始め、プロスペルス (Prosperus)、ゲンナデイウス (Gennadius)、マリウス・メルカートル (Marius Mercator) のやうな人々も、彼の生國をブリテンにしてゐる。それに對して同じくこの論争に携つた同時代者ヒエロニムス (Hieronymus) は彼を「スコットランド人」として嘲笑し、「スコットランド粥を鱈腹詰め込んだので」(Scotorum pitibus praegravatis) 記憶が鈍くなつたスコットランド人である。「彼の祖先がブリテンの附近の土地から來たスコットランド人なんだから」(habet enim progeniem Scotiae gentis de Britannorum vicina) と言つてゐる。ところが第二十世紀に入つてから、デンマーは、當時スコットランド人と言はれたのは、ほんたうはアイルランド人であつたと言ふことを論じ、ペラギウスの故郷もアイルランドであつたに相違ないと假定してゐるが、ロヂエもまた同じ説を主張してゐる。しかしラブリオールは「ペラギウスは恐らくアイルランド人であるよりも寧ろブリテン人であつた」と言ひ、最近出版せられたギユスターヴ・バルディ (G. Barty) の「聖アウグスティヌス・人間と著作」も、深く問題を取り上げた研究書ではないが、ブリテン人としてゐる。さういふ風に彼の生國はブリテンであるとも、スコットランドであるとも、またアイルランドであるとも言はれ、しかしそれをうづれとも決定する資料がないのである。

(一) De gratia Christi et de peccato originali, I, II, c. xxi, n. 24: ... in urbe Roma, ubi diutissime vixerat, atque

in his fuerat prius sermonibus contentionibusque versatus,...

(11) Epist. CLXXXVI, c. i, n. 1: Pelagium, quem credimus, ut ab illo distingueretur qui Pelagius Talenti dicitur, *Britonem* fuisse cognominatum, quod ut servum Dei dilexeris, novimus.

(12) 彼は Liber apologeticus de arbitrii libertate の中ペラギウスを Britanicus noster と稱してゐる。

(13) プロセスヌスの生存年代は三九〇年頃から四五五年までである。彼は Carmina de ingratis の中ペラギウスのことを Coluber Britannus (ヘリチンの蛇) と云つてゐる。

(14) この人は西六〇〇年頃から西九六六年頃まで生存した半ペラギウス主義の代表者であるが、Liber de ecclesiasticis dogmatibus の中ペラギウスをブリチン人と云つてゐる。

(15) 三九〇年頃から四五一年にかけて生存してゐた。彼も亦 Commonit. の中ペラギウスを gente Britannus (氏族はペラチン人) と云つてゐる。(Garnier, Mar. Merc. opera, I)

(16) Praef. in Jerem, lib. I et III, Scotorum pulchris praegravatis... habet enim progenium Scotiae gentis de Britannorum vicina.

(17) H. Zimmer, Pelagius Irland, Berlin, 1901, S. 20.

(18) Roger, L'enseigne des lettres class. d'Ausone à Alcuin, 1905, p. 214.

(19) P. Labriolle, Histoire de la littérature latine chrétienne, 3^e éd. par G. Bardy, 1947, t. II, p. 609, n. 1.

(20) G. Bardy, Saint Augustin, l'homme et l'oeuvre, 1948, p. 377.

ヒエロニムスが上記の書物で傳へてゐるところによれば、ペラギウスは立派な體格をした、風采の堂々たる人であつて、高い教育を受け、ギリシア語もラテン語も共に非常に流暢に話すことも、書くこともでき、またその神學の素養も至つて深かつた。彼は道德的に極めて謹嚴であり、極端な禁慾主義者ではなかつたが、禁慾の實踐に努力した

修道士 (monachus) であつた。聖アウグスティヌスは彼にうつて「私の聴いてゐるところでは、彼は聖者であつて、キリスト教的な生活におゝつても、少なからず向上した」人と言ひ、「彼を知つてゐる者が語るやうに、善良な褒むべき人間」だと言つてゐる。^(三) 聖アウグスティヌスはまた彼をノラの敬虔な司教聖パウリーヌス (S. Paulinus Nolanus) の友としても敬愛してゐた。^(四) 實際、ペラギウスはノラの聖パウリーヌスを初め、その他の勝れた司教たちと信書を往復してゐるのであつて、この往復書簡を、彼は後に自己の辯護に利用したのである。

(一) Hieronymus, op. cit: grandis et corpulentus,

(二) De peccatorum meritis et remissione et de baptismo parvulorum, I. III, c. i, n. 1: Verum post paucissimos dies legi Pelagii quaedam scripta, viri ut audio sancti, et non parvo propectu Christiani, quae in Pauli apostoli epistolas expositiones brevissimas continent.

(三) Ibid., c. iiii, n. 5: Verumtamen nos non negligenter oportet adtendere, istum, sicut eum qui noverunt loquuntur, bonum ac praedicandum virum, hanc argumentationem contra peccati propaginem.

(四) Epist. CLXXXVI, c. i, n. 1: Nam et nos non solum dileximus, verum etiam diligimus eum:..... tunc enim quia nobis rectae fidei videbatur.

ペラギウスはローマで生活してゐる間に數冊の書物を書いた。De fide Trinitatis libri III (三位一體の信仰の三卷)、『Eclogarum ex divinis Scripturis liber unus (選抄聖書一巻)』、『Commentarii in epistulas S. Pauli (パウロ書簡註解)』である。これらのうち「三位一體の信仰について」は、今日では、全く散逸してしまつたが、ゲンナデウスによつて「學生必讀の文字」として激稱せられたものである。第二の「選抄聖書」も散逸してしまつたが、聖アウグスティヌスの著書の中にその断章が残つてゐる。「聖パウロ書簡註解」は四一〇年以前に書かれたもの

であつて、本書によつてメラキウスの名聲が俄かに高まつた。聖アウグスティヌスが本書を知つたのは四二二年であつた。⁽¹⁾

- (1) A. Souter が本書を一九〇十年ロンドンで刊行した。Commentarii in epistulas S. Pauli がそれであるが、更にその後彼は Pelagius's Expositions of 13 Epistles of St. Paul, I. Introduction, 1922; II. Text, 1926 (In Cambridge Texts and Studies, IX, 1 and 2) を公出したのである。Migne ではメラキウスがデーメトリオスに宛てた書簡と共に本書を、彼の論敵エロニモスの集の第十一巻目 (P. L. XXX) としてある。キトラーによれば (loc. cit.)、エロニモスの書いたこととせられてあるものうちに、實際はメラキウスの書いたものが、いつの間にか紛れ込んでしまつたのである。

三

われわれは曩にペラギウスが道德的に謹嚴な人であり、極端な禁欲主義者ではなかつたけれども、禁欲主義の實踐に努力したと言つた。實際、彼はストア的な道德主義者であつた。彼はストア派の哲學の影響を非常に受けた。影響を受けたといふよりも、むしろ彼の思想の基底を作つてゐたものが、ストア派の哲學乃至ストア的哲學であつた。彼はキリスト教をも、さういふ哲學の立場から解釋しようとした。マクギファート (A. McGiffert) は、彼を殉教者ユスティノスと同じく、「キリスト教の觀念を終始一貫して道德的體系と解釋する人」と言つてゐる。⁽¹⁾ 彼が人間の自由意志 (liberum arbitrium) の道德的な力を特に尊重し、これが禁欲によつて鍛へられる場合には、徳の最高の理想に達することができると考へたのも、全くストア的であると言ふことができる。

(1) A History of Christian Thought, II, p. 130.

ストア的道德主義者であるところのペラギウスには、キリスト教の道德意識が、日に日に衰頹して行くやうに思はれた。そこで彼はそれを個人的責任感念の喪失に歸した。彼は人間の道德意識を衰頹させ、人間を道德的に無力ならしめ、人間の自由に對する信念を毀損せしめたものは原罪説と聖寵説であると考へた。キリスト教徒は、彼によれば餘りにも神の恩寵に頼りすぎ、そのために自己の道德的能力を喪失せしめるに至つた。それ故に何よりも必要なことは、人間の自然 (*humana natura*) 即ち人間が本來もつてゐるところの性質と力とを恢復することになくはならぬ。ペラギウスは四一五年に「自然につゞく」(*De natura*) を書してゐる。この書物は今日全く散逸してしまつたが、ここで彼が説いたものは自然に關するストア的原理である。今日も尙ほ保存せられてゐるデーメートリアス (*Deme- trias*) 宛の彼の書簡は、「自然につゞく」と同一の趣旨のものであると言はれてゐるが、その中で彼は「私が道德的
教育並びに聖なる生活について語らなければならぬ時には、いつでも、私はまづ第一に人間の自然 (本性) の力と性質とを指摘し、それが爲すことのできるものをあげ、聽く人の心にいろいろな徳を呼び起すのです」と言つてゐる。ストア的の考方がペラギウスの出發點であつたことは、われわれがこの論争を理解する上に、極めて重要である。マウスバッハは「ペラギウスは人間の善を行はうとする自然的な力を誇張し、聖寵の必然性を拒むことから出發した」と言つて、次のやうに語つてゐる。聖書で聖寵と呼んでゐるものも、ペラギウスの理解に従ふと、人間の自然 (*die menschliche Natur*)、神から贈られた自由意志にほかならぬのであつて、その中に、自己の力であらゆる形の倫理的善を行ふ積極的な力が内在してゐる。このやうに彼は神の恩寵を人間の自然の中に汲收し、このやうな自然即倫理的意志を禁慾主義の實踐によつて鍛へようとしたのである。

(1) *Epist. ad Demetriadem* (P. L. XXX), c. ii. キーメートリアスはアンキウス (*Anicius*) 家の一入である。メラギウス

はローマで生活してゐる間にこの人々と懇意になつた。アニキウス家の人々は四一〇年ゴート族のアラリックがローマに侵入して来た時、難をアフリカに避けた。近衛兵總指命令官でありまた執政官をも勤めたプロブス (Probus) の妻プロバ (Proba) の息オリブリウス (Othrius) の妻ユーリアーナ (Juliana) 及びこの二人の間に生れた娘デーメートリアスは皆なメラギウスの熱心な歸依者であつたが、聖アウグスティヌスはデーメートリアスの信仰がメラギウスの影響で狂められることを恐れ、絶えずそれに注意してゐた。

(二) J. Mausbach, Die Ethik des Heiligen Augustinus, 2te Auf., 1929. II Bd., S. 11.

このやうな立場から結果するものはいふまでもなく第一に原罪の否定である。彼が「聖パウロ書簡註解」を書いた時にはまだ邪説としての非難は起らなかつたが、しかしこの「註解」を綿密に吟味してみると、その中には後に教會が異端として非難した説が既に萌芽的に含まれてゐることが知られる。彼はその中で、アダムからわれわれにまで罪が傳へられて來たと主張する者は、精神が狂つてゐるのだと言ひ、色慾も肉體の死も自然的なものであることを主張し、また人間の存在における罪惡の必然性を否定して、罪の現實的存在と普遍性とはアダムがその最初の罪によつて示した惡例に歸せられるとなした。これは言ふまでもなく樂園における原始状態及び原罪の否定であつて、彼のストア的立場の當然の歸結であらう。彼は原罪説を全面的に拒ける。罪は全く個々の人間が自己の意志によつて犯すものであつて、アダムから傳へられたものでもないし、またわれわれが子孫に傳へ得るものでもないと彼は考へる。アダムの墮落は子孫の靈にも肉體にも何の影響も及ぼさなかつた。肉體はアダムから來たものであるが、靈はさうではないし、その上、肉體も神から作られたものであるから、神から作られたすべてのものが善であるやうに、善でなくてはならない。人間の自然(本性)及び能力は、アダムの始めにおけると同じ状態にある。如何なる人間も、アダムと同

じやうに、自己の性格を作り、自己の運命を決定する。ペラギウスはここに人間の自由の本質をおく。人間は過去においてどんな道を歩いたにしても、完全な自由をもつて、自己の欲する道を選ぶことができる。アダムは最初から死すべきものとして創造せられた。だから彼の死は自然的な出来事であつて、罪の結果でもなければ、罪に對する罰として加へられたものでもない。假りに彼が罪を犯さなかつたとしても彼は死んだであらう。アダムとともに罪が始まり、アダム(exemplum)に倣つてすべての人が罪を犯したことも事實であるが、しかし人間は罪なくして生きることが出来る筈である。ただ實際の場合として罪を犯さなかつた者が殆んどないだけである。ではどうしてすべての人は罪を犯すか。ペラギウスによれば、罪は人が自然の慾望に讓歩するから生ずる。自然の慾望は、それ自體としては無垢であるが、それに制御が加へられないと、人間を引きずつて罪を犯させるのである。すべての人は正しい行をなす力をもつてゐる、けれども何が正しさであるかを知らないのだから、まづそれが如何なるものであるかが教へられなければならない。さうペラギウスは考へるのであつて、このやうな思想はストア的(sapiens)の理想につづくであらう。かういふ立場からは、自己のうちに不可避的に無をふくむところの人間存在、外的人間と必然的に結びつかなければならない人間存在は把握せられない。一般にギリシアの人間存在がさうであるやうに、ペラギウスにおいても、結局、人間は自然存在にほかならない。彼が自然には、聖寵の援けがなくても、罪を克服し永遠の生を得る能力がある、キリストの救済の意義も、救世主がアダム(exemplum)の惡例に對して均衡を得るため、對當重量として置(exemplum)と教義(doctrina)とに、主として限られると考へたのも、そのためであると思はれる。

(一) P. L. XXX, 678: *Insaniunt, qui de Adam per traditum assertunt ad nos venire peccatum.*

ストア派の立場をわれわれは *natura sive ratio* として公式化することができる。勿論この場合 *ratio* とは何を

意味するかが問はれる筈であるが、それは今一應不問に附してよい。ところでペラギウスは理性は説かない。その代りに、彼にあつては、*fides* (信仰) が現れてゐる。そして、それによつて *natura sive ratio* の公式が破られる。キリストを信じ、洗禮を受けたものは、彼等の過去の一切の罪を許される。そして一度信仰を得たものが再び罪を犯さなければ、それが即ち救済なのである。この罪の許しは人間の何等かの功績によつて與へられるのではなく、ただ信仰のみによつて與へられる。「神は、敬虔ならぬものが回心すれば、ただ信仰のみによつて、義となしたまふ」と彼は言つてゐる。⁽¹⁾「他方、律法のはたらきではなく信仰のはたらきがなければ、信仰は死ぬ」のである。⁽²⁾ペラギウスは「ロマ書の解説」や「エペソ書の解説」のなかで、さういふ信仰の唯一絶対性を言ひ表はすやうな言葉を繰りかへしてゐる。⁽³⁾そこでわれわれがもし信仰の絶対性といふ點だけを取つて考へれば、ペラギウスはたしかにルターの *Sola fide* の遠く源流と言ふことができるであらう。ともかく彼は罪を犯した者が一度信仰によつてその罪を許されれば、それ以後彼等は罪なくして道徳的に清淨な生活をなすことができるかと考へたのである。ここにわれわれが注意しておかなければならないことは、この「聖パウロ書簡註解」では、後に彼の邪説の一つとして非難せられる幼児洗禮の意義によつての問題には、全然觸れてゐないことである。

(1) P. L., loc. cit., 663.

(2) P. L., loc. cit., 812.

(3) 例へば *Expositio in Rom.*, 4, 5; 5, 1; *Expositio in Eph.*, 2, 8.

ペラギウスの思想の線を通つて行くと、ストア的原理によつて構成せられた智者の理想に達する。神に對する非依存的な、人間の道徳的な能力が、著しく前面に現れる。大體、倫理的な意味における嚴肅性の要求は、東方教會に對

して西方教會のもつ特色であつて、聖アウグスティヌスにおいてもわれわれはさういふ嚴肅性に對する要求を認めるけれども、彼の場合にあつては、倫理的なものも常にそのままの姿ではなく、宗教的、形而上學的、神秘的なものによつて深められてゐた。聖アウグスティヌスとペラギウスとの根本的相違は、この點にあつたと思はれる。この相違は原罪や聖寵に關して特に顯著に現れてゐる。聖アウグスティヌスの聖寵論については、他の機會に稿を更めて論究したいと思つてゐるが、彼が傳へてゐるところによれば、ペラギウス派では「聖寵は善なる意志の功績に應じてわれわれに與へられる」と考へた⁽¹⁾。即ちペラギウス派においては償罰應報の觀念が著しかつた。聖アウグスティヌスの所謂ペラギウス論争が始まつた當時、また聖寵の教義は、東方においても西方においても、確立せられてゐたのではない。西方教會の人々は、救済には何か一種の助力が必要であり、且つそれが無償で與へられるといふことを信じてゐたが、この助力が如何なる性質のものであるかに關しては殆んど理解せられてゐなかつた。それに對して東方教會においては運命觀が普及し、その結果、聖寵の助力の面が強調されて、(後の言葉を借りて言へば)先行的聖寵(*gratia preveniens*)が比較的輕んぜられたからであらう。もともと東西づれの教會においても、原罪の概念にせよ、聖寵の概念にせよまだはつきりした形態をもつてゐたわけではなく、むしろそれらは聖アウグスティヌスが論争に参加し、論争が進行してゆくうちに、だんだん精細に規定せられたのである。しかし原罪や聖寵の概念内容に立ち入ることはこの論文の趣旨ではなく、われわれの課題は論争の外部的経過を振りかへつて見ることである。

(1) De gratia et libero arbitrio, c. xiv, n. 27: Etsi non datur secundum merita bonorum operum, quia per ipsam bene operamur; tamen secundum merita bonae voluntatis datur: quia bona voluntas, ... praecedat orantis, quam praecessit voluntas credentis, ut secundum haec merita gratia sequatur exaudientis Dei.

四

ペラギウスはローマでカエレスティウス (Caestius) (或はコエレスティウス Coelestius) と親交を結んだが、このことは、それから後のペラギアニズムの展開に非常に大きな影響を及ぼすことになつた。ペラギアニズムと言っても、それはプラトニズムがプラトーンから發展し、ヘーゲリアニズムがヘーゲルから發展して來たやうに、ペラギウスから發展して來たものではなく、むしろ二人の合作だからである。カエレスティウスはカムパニアの生れで、イタリア貴族の出である。ローマで生活し、ペラギウスがローマに居住してゐた頃、彼もそこで辯護士をしてゐた。彼は生れながら闊人であつたと言はれてゐるが、しかし凡庸でない才能を恵まれ、鋭い理論をもつてゐた、しかも修道院生活に對して絶えず情熱的に憧憬してゐた。これが彼を禁欲生活に導き、また結びつけた要因であつたであらう。彼はペラギウスの實踐的な學說に理論的基礎を與へることに努力した。聖アウグスティヌスはこの二人の性格を比較して、カエレスティウスが率直であるに對してペラギウスは打ち解け難く、前者が頑固であるに對して後者は表裏があり、前者が素直であるに對して後者は狡猾であると言つてゐる。

- (一) De gratia Christi et de peccato originali, l. II, c. xii, n. 13: Proinde si ostendero, . . . quid inter istum (*Pala-gium*) et Coelestium in hac quaestione distat, nisi quod ille apertior, iste occultior fuit; ille perinactor, iste mendacior; vel certe liberior, hic astutior?

四一〇年ローマがアラリックによつて劫掠せられたので、その翌年の春、ペラギウスもカエレスティウスもローマを去つて、北アフリカに赴き、當時聖アウグスティヌスが司教を勤めてゐたヒッポを相前後して訪れた。しかし

ヒツポのカトリック的環境は、ペラギウスの到来にもカエレスティウスの到来にも餘り注意せず、むしろドナツス(Donatus)との論争が行はれる筈の會の準備に忙殺されてゐた。聖アウグスティヌス自身も、この論争のためヒツポを離れて、カルターゴに行つてゐた。彼はその後數回カルターゴでペラギウスに會つたが、親しく交るには至らなかつた。ペラギウスは聖アウグスティヌスに對してどの程度の尊敬の念を懷いてゐたかわからないが、四一〇年以前に完成せられた彼の「聖パウロ書簡註解」には、彼が聖アウグスティヌスについて何ごとかを知つてゐた徴は見られない。聖アウグスティヌス自身が語つてゐるところによると、「告白」第十卷で神に向つて繰り返されてゐる「汝の命じるものを與へたまへ。そして汝の欲するものを命じ給へ」といふ言葉が彼の友人によつてペラギウスに傳へられた時、ペラギウスは甚く憤慨した。おそらく彼は餘り聖アウグスティヌスを尊敬してはゐなかつたのであらう。ところが他方聖アウグスティヌス自身、彼が始めてペラギウスに逢つた時のことを「ペラギウスの訴訟議事について」の中で述べてゐる。彼がペラギウスの名を始めて聞いたのは、ペラギウスがまだローマにゐる頃であつた。彼の名は非常な尊敬をもつてあげられた。ところがそれから後になつて彼が聖寵を否定することをしばしば耳にし、聖アウグスティヌスは彼に逢ふか或は彼の論文を讀むかして、それを確めたいと思つてゐた。そのうちに彼はアフリカに來、ヒツポに上陸したが、豫想外に早くそこを去つてしまつた。それから後、聖アウグスティヌスがドナツスとの論争に忙殺せられてゐる時、彼はペラギウスに會ふ機會をもつたのである。四一二年、彼はたまたまカルターゴで單純な會話のうちに「幼児が洗禮を受けるのは罪の許しのためではなく、幼児がキリストにおいて聖別せられるためである」と言明せられるのを聞いた。聖アウグスティヌスはその議論をしてゐる人が、格別權威のある人ではなかつたので、その人と議論を交へようとは思はなかつたが、しかし極めて困難な問題が公の場所で謂はば吐き出すや

うに語られてゐるのを誤した。しかしこのエピソードが彼の説教 (Sermo CLXXVI, c. ii, n. 2) に眞の教説が説かれる動機となつたのである。ペラギウスは「しかし、聖トニツカが強辯してはなから、やがてペルシアンが赴した。

(1) *Dono perseverantiae*, l. II, c. xx, n. 55: *In eis certe dixi Deo nostro, et saepe dixi: "Da quod iubes, et iube quod vis". Quae mea verba Pelagius Romae, cum a quodam fratre et coepiscopo meo fuissent eo praesente commemorata, ferre non potuit, et contradicens aliquanto commotius, pene cum eo qui illa commemoraverat litigavit.*

(11) *De gestis Pelagii*, c. xxii, n. 46: *Nam, ut de me ipso potissimum dicam, prius absentis et Romae constituti Pelagii nomen cum magna eius laude cognovi: postea coepit ad nos fama perferre, quod adversus Dei gratiam disputaret; quod licet dolerem, et ab eis mihi diceretur, quibus crederem, ab ipso tamen tale aliquid, vel in eius aliquo libro nosse cupiebam, ut si inciperem redarguere, negare non posset. Postea vero quem in Africam venit, me absente, nostro, id est, Hipponensi littore exceptus est, ubi omnino, sicut comperi a nostris, nihil ab illo huiusmodi auditum est: quia et citius quam putabatur, inde profectus est. Postmodum eius faciem Carthagine, quantum recolo, semel vel iterum vidi, quando cura Collationis, quam cum haereticis Donatistis habituri eramus, occupatissimus fui: ille vero etiam ad transmarina properavit.*

(III) G. Bardy, *Saint Augustin, l'homme et l'oeuvre*, 1948, pp. 383 f.

他方、カエレスティウスはカルタージュの司祭になりたいと要望した。その頃彼は「罪の遺傳説を駁す」(Contra traducem peccati)——この書物は今日では散逸してしまつた——を書いて、ペラギウスの説に基礎づけを與へ、原罪に關するカトリックの教説が、誤謬ではなから、不充分的なものであることを明かにしようとした。この書物の

讀者の一人に、ミラーノの聖アムブロシウスの助祭であつてその傳記を書いたパウリーヌス (Paulinus) があつた。パウリーヌスは、もしカエレスティウスが司祭に立候補する意向をもたなかつたら沈黙を守つたかも知れないが、しかし彼が司祭に就くことを知つて、その謬見を黙視してることができなかつた。そこで彼は司教アウレリウス (Aurelius) に一通の書を提出して、その中でカエレスティウスの六箇條或は七箇條の命題を邪説として訴へた。メルカトルによるカエレスティウスはこの命題を單に自ら教へたばかりではなく、他の人々にも教へさせたのである。その六箇條 (或は七箇條) 命題とはメルカトルによると次のやうなものである。(一) アダムは死すべきものとして創造せられたのであつて、假に罪を犯さなかつたとしても、死んだであらう。(二) アダムの罪はただ彼に禍を與へただけで、人類には禍を與へなかつた。(三) 生れたばかりの嬰兒は墮落以前のアダムの罪と同じ状態にある。(四) 幼兒は、洗禮を受けなくとも、永遠なる生をもつであらう。(五) 全人類はアダムの罪や死によつて死ぬのでも、またキリストの復活によつて甦るのでもない。(六) モーゼの律法は天國へ人を導くことにおいては福音と同じ力をもつてゐる。(七) キリストが降誕したまふたより前にも、罪のない人がゐた。この提訴箇條はたしかにペラギアニズムの眞髓を含んでゐる。カエレスティウスは、この提訴によつて、四一年、カルターゴの教會々議に出頭するやうに命ぜられ、それを誤謬として撤回することを求められた。しかし彼はそれを拒み、却つてアダムの罪が遺傳するか否かは未解決の問題であり、従つてそれを否定することも決して邪説ではないと斷言した。その結果、カルターゴの司祭にならうといふ彼の希望は挫かれ、彼の叙品は拒絶せられたが、そればかりではなく上記七箇條の命題も邪説と宣告せられた。彼はローマの教皇に直接訴へる意向であることを表明したが、この計畫を實行に移さないで小アジアのエペソに赴き、そこで司祭に命ぜられた。エルサレムの司教ヨハネネスの支持を得たからである。ペラギアニズム

はカルターゴを中心に漸次イタリア、シケリア、ガリアに弘まつて行き、人々は繰り返して、神の聖寵は何の役にも立たず、人間はただ自己の力だけで救はれる自由をもつてゐる、且つキリストの死は例^{エクサシブルム}の價値しかもたず、救済に洗禮の必要はないと言ふやうになつた。かういふ説は多くの人々に反抗しがたい誘惑になり、また實際、東方では、ペラギアニズムは聖アウグステイヌスの教説以上に普及してゐた。

(一) G. Bardy, *op. cit.*, p. 381.

(二) パウリーヌスのこの提訴箇條は *Contra tradicem peccati* の忠實な抜粹らしい。メルカトールは二箇所でそれをあげてゐるが、本文の引用は *Commonit.*, II, 5 であるものである。もう一つの箇条では(四)が省略されて六箇条になつてゐる。聖アウグステイヌスは *De gest. Pelag. c. xi*, n. 23; *De grat. Chr. et de pecc. orig.*, I, II, c. xi, n. 12 及び(六)と(七)とを(二)と(三)との間におき、また後の書の I, II, c. ii, n. 2 及び(二)と(三)とが一緒になつてゐる。(四)は *De gest. Pelag. c. xi*, n. 23 又は省略せられてゐる。

五

聖アウグステイヌスが反ペラギウス論争に進んで参加したのは、この四一年の教會々議以後である。ペラギウスの説が、カルターゴを中心にしてその附近に弘まつて行くにつれて、その地の司教たちはそれに對してはつきした抵抗の態度を決定しなければならなくなつた。しかし聖アウグステイヌスにとつては、もつと内面的な、彼自身の體驗に基いて對決を迫るところのものがあつた。彼は既に久しく罪、惡、聖寵の問題に惱んで來た。もともと彼は嚴しい内省的な人であつた。彼は鋭い、分析的な知力をもつてゐたが、それは何に對してよりもまづ自己自身に對して

向けられた。彼の問題の把握はこの分析的な、鋭い、厳しい反省の結果起つて来るものであつた。ペラギウスとの論争を契機として彼が深く探究した罪、悪、聖寵等々の問題も、さういふわけで、彼自身の體驗と反省の問題であつた。彼は自己を振りかへつて見た、そしてそこに聖寵を見出した。彼は自分の同心も自分の力によつてではなく、神の聖寵によつて成し遂げられたものであると信じてゐた。彼にキケローの「ホルテンシウス」(Hortensius)を讀ませたのも、眞理に對する情熱を彼のうちに燃え上らせたのも、また彼をカルターゴへ、ローマへ、ミラノへ、更にカツシキアクムへ導いたのもことごとく神の聖寵のはたらきであつた。彼は聖寵の意識をもつことなしに、自己の過去を振りかへることはできなかつた。「私はパウロの書を讀み始めるとプラトイン派の書で讀んだ眞理が皆なここに、しかしそれらとは異つて、汝の聖寵の讚美の中に、語られてゐることを知つた」と彼は書いてゐる。⁽¹⁾「そしてこのやうに語られてゐるのは、見るものが彼の見る對象だけではなく、彼の見る能力そのものも『他から受けなかつたかのように誇る』(ユリント前書四ノ七)ことがあつてはならないからであつた。……それはまた、見るものが、常に同一である汝を眺めるやうに勧められるだけではなく、汝を捉へることのできるやうに癒やされるためであつた。且つまた遠く離れて汝を見ることのできなないものにも、その道を歩んで汝の方に來らせ、そして汝を見て捉へさせるためであつた。」「告白」のこの言葉は內的體驗としての彼の聖寵の概念を最もよく示すものであらう。神の聖寵がはたらかなかつたら、自己の力だけでは、何ごとも爲すことができなかつたといふ意識を、彼はもつてゐた。「以後、自分の息のあるかぎり、カトリックの聖寵についての教を護るため、最善を盡さう」と聖アウグスティヌスは決意した。⁽²⁾

- (1) Conf. I. VII, c. xxi, n. 27. 服部英次郎譯、中卷、四二頁以下。
(2) G. Bardy, op. cit., p. 383.

聖アウグステイヌスは、今まさに彼が當面してゐる問題について、たまたま友人マルケルリヌス (Marcellinus) が彼の見解を質したのを機會に、一應、彼の考を纏めた。マルケルリヌスの尋ねた問題は人間の自然的な死、原罪の遺傳、幼兒の洗禮、正義な人間の無罪性 (impeccabilitas) の四つであつた。それに答へて、四一二年聖アウグステイヌスは二冊の書物を書いた。それは「罪人の報ひと赦免とについて」三卷 (De peccatorum meritis et remissione libri III) と「靈と儀文とについて」 (De spiritu et littera) とであつて、その中で彼はペラギアニズムを論駁して、原罪の存在、幼兒洗禮の必要、罪のない生の不可能性、儀文の外部的聖寵に對する靈の内部的必然性を實證的に確立した。下つて四一四年頃、エウトロピウス (Eutropius) 及びパウルス (Paulus) とする二人の司教——この二人はスペイン人のやうである——が聖アウグステイヌスのもとへ、當時スペインを始めその他の地でカエレスティウスが書いたものとして流布してゐた「カエレスティウスの定義」 (Definitiones Caelestii) を送つて來た。これがほんたうにカエレスティウスの書いたものかどうかは別として、この書物の著者は辯證法に習熟した人であつて、時には詭辯と思はれる論法さへ平氣で弄んでゐる。これを反駁して、聖アウグステイヌスが四一四年或は四一五年に書いたものが、「人間の義の完成について」 (De perfectione iustitiae hominis) である。本書は非常に讀みにくく、且つ分析し難いが、極めて重要な文獻であつて、彼はその中でもう一度人間に罪を犯さないことが可能であるといふ説の、迷妄である所以を論證してゐる。

(一) これは Garnier, Marii Mercatoris Opera I, 384 sqq. Paris, 1673 の中に校訂蒐録せられてゐる。

ところでペラギウスが曩に言及したテーマトリアス宛の書簡を書いたのも、今は散逸してしまつた「自然について」を書いたのも、その頃 (四一五年) であつた。彼がそこで主張してゐるものは、敬虔ならぬものが義とせられ、

且つそれによつてわれわれがキリスト教の信者である「神の聖寵に對して、人間の自然を擁護しようとする」ストアの原理であるが、⁽¹⁷⁾彼はそれを立證するために澤山の權威を典據としてあげてゐる。その中にはヒラリウス(Hilarius)やアムブロシウス(Ambrosius)を始め、ヒエロニムスや聖アウグスティヌスの初期の著作も含まれてゐた。ペラギウスはこの書物をティマシウス(Timaeus)及びヤーコーブス(Jacobus)といふ二人の修道士のために書いたのである。この二人はともに名門の出であつて、高い自由學科の教養をもつてゐたが、ペラギウスによつて禁慾主義に回心し、完全なる生活に憧れてゐた。そして新修道士の熱情にかられて、この書物の中に説かれてゐる教を弘めやうと努めた。しかし彼等は、聖アウグスティヌスに會つてから後、ペラギウスの教に不安を懷き、彼等のもつてゐた「自然について」を聖アウグスティヌスのもとに送つて、その批判を求めた。聖アウグスティヌスはその時までペラギウスの書いたものを讀んだことがなかつたから、ティマシウスとヤーコーブスとがその所有するものを送つてくれたのは、彼にはまことによい機會であつた。彼はそれを精讀してそれに對する反駁を書いた。それが彼の「自然と聖寵とについて」(De natura et gratia)である。彼はそれを脱稿するとエウオディウス(Erodianus)に寫稿を許し、またエルサレムの司教ヨハネスに送つて、教皇インノケンティウス一世(Innocentius I)にもノラのパウリーヌスにも稿本を送つた。それから十年の後、「修訂録」のなかで彼はかう言つてゐる、⁽¹⁸⁾「その當時なほ一冊のペラギウスの書物が私の手に入つた。彼はその書物のなかで、神の聖寵に對して、人間の自然(本性)を、論議によつて、できるだけ辯護しようとした。しかるに聖寵こそ敬虔ならぬ者を義となし、われわれをキリスト教の信者たらしめる原理なのである。それ故に私は一冊の書物を書いて、その中で聖寵を辯護し、それは自然にそむくものではなく、却つて自然がそれによつて解放せられ、支配せられるといふことを答へた。その書物を私は De natura et gratia と名づ

けた。他方、ヒエロニムスも「ペラギウス派を駁する對話」(Dialogus contra Pelagianos)を書き、ペラギウスに反對した。かくしてペラギウス論争が開始せられたのであるが、聖アウグスティヌスはこの論争の始めにおいて、義にあげた「罪人の報ひと赦免とについて」及び「靈と儀文とについて」においても、また今の「自然と聖寵とについて」においても、ペラギウス派の人々の所説が誤謬であることは論駁したが、彼等の名をあげてはゐない。それは彼が、パウリーヌスに書き送つてゐるやうに、^(三)彼等が速かにその邪説を改めて、正しい信仰に立ち歸ることを容易ならしめるためであつた。

(一) *Retract.*, I, II, c. xliii: *Veni etiam tunc in manus meas quidam Pelagii liber, ubi hominis naturam contra Dei gratiam qua justificatur impius, et qua Christiani sumus, quanta potuit argumentatione defendit.*

(二) *op. cit.*

(三) *Epist.*, CLXXXVI, c. i, n. 1: *Cui quidem libro, eisdem rogantibus, quia id fieri oportere videbamus, tacto nomine auctoris, ne offensus insanabilior redderetur, unius nostrum disputatione responsum est quod libro continetur.*